

音楽療法—（１）「癒し」の文化的背景など

木村 滋

Music Healing or Therapy: Cultural and Other Background

Shigeru KIMURA

要旨：音楽療法は癒し（healing/therapy）であり、文化論的には主として宗教的な癒しに属していた。癒しは世界中で試みられてきた。現代の医療体制の中では、癒しの技法は care、cure にとって必要であろう。本稿では「癒し行為」は医学（medicine、medical science）を区別して記述した。文化論の内側にあるこれまでの「癒し」は情動（emotion）の世界にあり、そこには神（的な存在）が介在していた。しかし、現在の「癒し」には神が介在するものは文化の片隅に追いやられている。そして神が介在しなくなった分だけ、今日の新しい癒しには「神の癒しの特性」に代わる「節度・健やかな心・美しさ・心地よい緊張」などの属性を備えた別の装置を模索することが必要になっている。

キーワード：癒し、文化、情動的節度、美しさ、心の健やかさ

Summary : Music therapy has, in the cultural sense, belonged in the same category as faith healing taken as some kind of medicine around the world. Today, the healing marked off from medical science here seems to have something to do with any kind of medical treatment, care and cure. In the cultural science, the healing is connected to the emotional functions of human being. In a situation where a healer and a person to be healed have brought about, interposed gods or some divine providence or divine inspiration the healer invited, and the large part of which we lost, or have thrust to the subliminal self. We, today, have to grope for the new factors of healing device that make up for factors in faith healing we have already lost, such as emotional integrity: beauty and fascination, enjoying good health and so forth.

Key words : healing, culture, emotional integrity, fascination, enjoying good health

序

本稿全体の目的は、音楽が持つ healing/therapy を探ることにある。そのために、（１）では音楽療法の healing の意味とその背景を捉え、音と音楽の美しさにまつわる幾つかの問題を取り上げる。その後の中心となる（２）以下の作業では、音楽に付帯する条件としての story, character, その他を変えた場合のデータを基にした healing/therapy を検討して行く予定である。

「癒し」（healing）は、（１）の段階では医学というよりは文化論であるという印象が強い。文化論であれば、医学的診断・治療との区別をする必要がある。まず癒しの行動を語義から探りたい。

癒し（healing）は、“the process of becoming or making somebody / something healthy again; the process of getting better after an emotional shock”（Oxford Advanced Learner’s Dictionary）（『人やものを再び健康／健全にする過程、つまり、情（緒）的な衝撃を受けてよりよい状態にする／なる過程』）である。下線部の説明は極めて分かり易い。

医療には、遠い昔から healing も含まれていたようである。しかし、現在は医学と healing の間にはい

介護福祉学科教授（英語科、音響音声学）

本研究は、平成15年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

くつかの分(業)化が進み、その分化した各領域の境界を一般人が理解するのは難しく曖昧に見える。Healing の所在を明らかにするためにも、医療に関わる主な用語の概念 (op. cit.) を、以下のように整理しておきたい。

- (1) 診断 (diagnosis)
病気や事態の正確な原因の発見・同定する (identify) こと
- (2) 医療・治療・治療法 (cure)
病後に人/動物を再び健康にすること、病気をなくすこと、問題を成功のうちに処理すること
- (3) ケアー (care)
医療、患者管理 (一般に医学や公衆衛生の面で地域や個人の利益のために知識を用いること)
- (4) セラピー (therapy)
身体的な問題や(心身の)病気を治療、処理、手当てすること。*セラピストTherapist (療法士。専門的にある特定の治療法の訓練を受け、または技能を有する人)
- (5) セラピューテックス (therapeutics)
療法、治療。特に疾患・障害の治療に関する医学の実施分野。*治療、療法、処理、処置 (treatment; 一般に患者の内科的・外科的治療)
- (6) 医療 (medical treatment, medical care, medical attention、 medical service)
- (7) 医学 (medical science; medicine)

上記により医学、看護、介護のそれぞれの守備範囲は大よその見当はつくが、「癒し」はこれら3つの領域のいずれにも関わっていることは、後述の Wilce の記述を見るまでもなく、今も変わらないようである。ここで、日本音楽療法連盟による「音楽療法の定義」を見たい。それによる音楽療法の定義は「音楽の持つ、生理的・心理的、社会的働きを、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上に向けて、意図的、計画的に活用して行われる治療技法である。」¹⁾

この定義の末尾の「・・・治療技法である」は後に検討するとして、日本音楽療法連盟の定義は上記の healing 「人やものを再び健康/健全にする過程、つまり、情(緒)的な衝撃を受けてよりよい状態になる過程」をより詳しく『音楽は人間の「生理」「心理」に作用し「心身の障害の回復」「機能の維持・改善」「生活の質の向上」を促すことが可能である』という表現で置き換えている、と見ることができる。この置き換えられた表現は、従って、上記の healing の概念をより正確に表現したもので、音楽療法とは healing であり、「音楽」は美的な「情(緒)的衝撃」であるということになる。また、この音楽療法の概念では、上記の医療に関する用語の範囲では、医学的診断・治療は別にして広義の病気の判断を含めると(1)～(4)の幾つかが該当する。

「癒し」は一般にヒトに情緒的な方法を用い、特に病める人を健康な状態にする過程であり、これらが現在の医療にどのように取り込まれたかの成果についての、科学的に十分な報告は少ないが、今後、注目に値するようと思われる。また、現在の癒しにおける「情緒的刺激」は例えば音楽や美しいものがより相応しいようである。

I. 文化論における癒し (healing)

世界の諸文化の中には、これまで、どのような癒しのシステムがあったのだろうか。ここでは文化論における「癒し」を述べたい。情動・情緒的な手法(衝撃)で病気が快癒する/させる過程である「癒し」の所在は、まさに文化論の中にある。文化論における「癒し」は以下のようなものである。これらは James Wilce (Healing)²⁾ を内容毎にできるだけ項目化して訳出したもの(要約)である。

Wilce は癒しを以下のように記述しているが、我々の生活文化圏の中に、それらに類する項目は幾つ思い当たるだろうか。彼は直接に言及はしていないが、我々の文化の「癒し」には、初詣、七五三の宮参り、節分(豆まき)、雛祭(5月の節句)、地鎮祭、お盆、クリスマス、年越し等の習俗的なものや恐山の口寄せ(シャーマニズム)、お祓いの儀式等もある。これらは折節の祈りと安らぎを込めた習俗となり、それによって我々は、今もある程度、癒しを求めようとする。

仏教の意味不明の經典の音声は、死者を送る家族にはある種の癒しの効果がある。仏教の僧が唱える荘厳な音律と響きを持つ真言「オン バラ ダ バ ザラ ダン」(オン・金剛尊よ・願を満たしたまえ・ダン)、「オン バ ケイ ダ ノウ マク」(オン・雄弁になしたまえ・帰命したてまつる)等は、意味を付さなければ、威厳と恐れと摩訶不思議な力を秘めている。Wilce は文化のこの部分に言及しているのである。(真言の訳中の「・」はpauseを示すために筆者が加えた。)

《Wilceの「癒し」について》

1. 言葉は、世界中で、診断と治療には主要な要素である。言葉に備わる癒しの機能は、診療や大衆の儀式を超えるものがある。その機能には病氣治療ばかりでなく、病の癒し(人を日常生活に復帰させること)も含まれる。従って癒しの議論は、その実効性と道徳性に関する。
2. Healer (癒す人) の言葉が希望を強め、病氣治療の見通しをよくする気休め (placebos) なのか、患者に違った外の世界と状況を経験するように説得するのか。(例えば癒すために現にイエスが存在すると思われるようなイメージを喚起させる言葉、思いやりありげで、しかも修辭的な極めつけである癒し手の自己正統派主張 (self-authenticating claim) が、この上なく巧みに説得をするのか。あるいは癒しの事象に在る相互に作用しあうものに共鳴すると癒し影響が(あるいは、わずかばかりの「癒し」が積もり積もって効果が)あるのか。体験では、神話やその影響を受け止める感覚、想像力と行動が心の動きに結びつくかぎり、癒しに使う比喻(ことば)は重要である。
3. 言葉を用いる現象が癒し現象へと変わるのは指示的な内容 (referential contents)ではなくて、healer の話の中味に合った手法が緊張を起こさせたり、緊張を和らげたりするのである。

(注. 指示的な内容について、例えば「桜」という言葉が指示する内容は「桜はバラ科の落葉高木で、花弁は5弁、6弁・・・、枝垂れ桜、ソメイヨシノという内容」である。「桜」が喚起させる民族的なもう1つの意味には「潔さ、清浄さ、美しさ、武士道等の喚情的な内容」がある。Wilce は言葉の指示の意味ではなく、後者の喚情的意味を示唆して言及していると思われる。)

- ①癒し手の声は癒すには美しくあるべきである。シャーマンの歌ならば音声、詩、リズム、心象の美しさ、集団で歌うことはヨルモの民(ネパール)には治療効果がある。
- ②アマゾンのスエ族には、病人の中にあるものと正反対のもので均衡をとる。それに見あった特徴を喚起する動物の名前を言う。その場合に、治療歌は利き目がある。
- ③最後に、『兆候(しるし)』(強力な霊力があるような、まさに人間でないような声)と『兆候を想起させるもの』(我々は、まさにこのケースに、癒しが可能であったその神話時代を存在させる)が体ごと患者の意識を変えさせるようである。
4. 診断は治療には不可欠であり、癒しというドラマに役立つ。霊験がアラタカならば、特に診断自体が力を備えており、安心感をもたらすようである。
 - ①言葉は、生物・精神医学からバングラデッシュの占い(神託)に至る治療習慣にまで介在する。
 - ②東西医学の医師の言語表現は、病氣の実態を探る道具である。厄除け・神託の言葉は、それ自体に注意を向けさせ、診断と治療の両方に効き目ありげな魔術的な働きをする。
5. 癒しの仕組みは時代を通して、大きな文化的要素に繋がっている型/様式である。
 - ①体の癒し、心の癒し、解放/救出(エクソシズム・厄払い)ーカトリックの癒しの3ジャンルは特に支離滅裂な現象であるが、相互に関連するところもある。『自分中心』で、ある人達には治療の効き目がありそうな経験・話の型を織り込んだり、それを救いにも治療にもならない者に語りかける場合もあるようだ。
 - ②癒しの参加者は、降神術 (Spiritism)、シャーマニズム(巫術: 離魂型・憑依型、北欧・日本・北アジア・シベリア東北部、世界各地に分布; 筆者)、癒しの型により大きく違う。患者、施療者、霊 (spirits)、家族達等は、癒しのジャンルにより多少とも(原因と結果に対する: 筆者)責任を分かち合う。
 - ③中流階級のアメリカ人は自分のトラウマを語ると治療効果があると考え。また、癒す人の言葉には希望があり、そして一言は『事を行う』のでー苦しみを言葉にすることは危険であると考

える。

一方、型によっては苦しみを言葉に出せば病気が治るとか、他に影響するので言葉にしないのだと言う。所有物 (cults・カルト：所有) の縁起担ぎは、ある物を持っていると最初の偶発事件 (事故) を避け、後にはその物は偶発事件除けとなる。最後には一元気になるために一影響をうければ、所有カルト (縁起かつぎ集団) に参加し、神力で話したり (踊ったり、行動する等) する印となる。

6. 言葉と癒しの型の分類は広い意味での思想の型に関っている。スエ族の治療歌は患者の体内を吹き抜けて疾病を拭い落とす。我々には精神を経験的知識に基づく科学 (cognitive science) の正当な対象にしようとする傾向がある。言葉と癒しが一体であるとする思想の型は、我々が目指す認識科学に対して挑戦している思想ということになる。
7. どんな特徴の話し方に治癒効果があると見るかは、特定の思想と社会形態によって影響される。
 - ①トラウマと (癒しの) 話し手の例では、話し手は書き手 (被治療者) が記憶を再構成するのを助けている。つまり、病気の体験を適切に捉えて徐々に (癒しの) 作業へ導入する譬え話 (比喩) があったり、サイン・霊が癒す作業の手段として不可解な言葉があったり、不健康な考え・生活習慣を変えようとする、ドラマテックでリズムカルな話し方もある。
 - ②こうした癒しに付随する要素は、言語の概念、情緒、個人的特質、身体である。「言語と癒し」を十分に説明するには、病・疾病と、広い意味の医学が癒しの話の中にどう組み込まれているかを調べればよい。
 - ③「感覚を言葉に置き換えることができないこと」は、例えば、病理学的異常一失感情症 (感情表現不能) とレットルを貼られ、『身体化・具体化』 (欲求が身体徴候に現れる過程) と診たり、心理学用語では苦痛 (distress) という表現で片付けることもある。しかし癒しの場合、「言語と癒しの関係」は、それ自体、力を反映するように、それ (言語化不可能) を言語文化一思想体系の中に括ってしまうのである。
8. 癒しの言語は明確でなければならないのか。
 - ①アマゾン・ワラオ族の癒しの伝統では、癒しの効き目は、言葉の意味が患者や聴衆に理解できるほどに明確にしないという特徴がある。無意味な語を巧みに曖昧に話すことが癒すのだと主張するのは、説得に用いる言語明瞭さの限界の目安を大変よく示している。
 - ②アマゾン・ワラオ族の癒しでは、明確な言語と曖昧な言語の選択はシャーマンの権威を示すことにつながる。
 - ③シャーマンが自分の権威を宣言する時は、話し言葉 (殆どが秘伝の音域の言葉) は戦略的に明確にする。これは、患者が自分の病気とうまく対処できるように指導するために、医師達が患者の言葉を遮ったり、素人言葉を巧く使えない場合も言葉が明瞭になると同じである。そういう場合には (患者との) 力関係も現れる。
 - ④メキシコの霊能者達には、癒しの対象を個性化しドラマ化し分析対象化する考え方はない。(宗教) 法人集団の癒し儀式には人格分析はない。彼らは言葉の強力な効き目に関りを持たず、自分が「超越性」に共鳴している証を集団で作りに出して公然と表明する。
 - ⑤シンガリーズ (スリランカ人) の厄払いのような (宗教) 法人儀式では、力関係をドラマにする。悪魔払いのユーモア劇は2番目の地位 (中流階級) と参加者の (下層) 階級を示している。
9. 言葉は、上記のように人を癒すようである。しかし、言葉は、絶対者 (神)、傍観者、粗捜し屋に至るまで『浴びせ』話すものである。

2. 現代の「癒し」の傾向

Wilce が述べる内容は、世界中で今でも、程度の差こそあれ、行われている。我々の文化にも意識のどこかで否定できないものが今でもある。しかし、Wilice のいう癒しの類は、文化の片隅に追いやられ、「癒し」の主流でなくなってから久しい。時代が進み、この類は「癒す」機能を次第に失い、現在は別のものが取ってかわった。例えば、美しいもの・清々しいもの一音楽、絵画、演劇、物語、

真理・事実・真実など一がもたらす情動的衝撃、即ち「癒すもの」ものであろう。

神話の中の常識を超えた不思議な神の力による衝撃も、上記の美しさ・清々しさがもたらす情動的衝撃も、その結果の感動も全て人の脳の中で起きている。

2. 1 「感動」する脳—ユング流の見方

ワールド・カップ女子バレーボール(2003)における日本選手の懸命な活躍を観て我々は感動する。また、世界マラソン競技大会の日本選手の力走を観て感動する。モーツァルトの音楽を聞いてその旋律・音の透明感、無心なリズムを感じ快を得て記憶する。これら「感覚→快」過程の感動の記憶は何か。その時、我々は自国の選手の勝利を願い・祈り、喜び、がっかりもする。他国の選手の素晴らしいプレイや走りも賞賛する。が、やはり自国の選手が勝てば嬉しくてホッと安心する。このような「・・・嬉しくてホッと安心する」ような種類の感情は何故出てくるのか。

東京郊外の武蔵野には、まだ雑木林が残っている。その林の枯れ草が残る晩秋の陽だまりの中で、越冬するかのようにてんとう虫が固まるように集合している様子を見ることがある。通常、彼らは冬が来れば死ぬものと思われていた。彼らは、そのように集結すればより長く安全に生存できるということを知っていることになる。これは、ヒトが無意識のうちに太陽の恵みを受けようとするように、彼らもその方が生存方法として有効であるとしてDNA(本能)に組み込んでいるわけである。

進化の過程のある時期に、ヒトもまた太陽は寒冷な時期には恵みを与え、心が安らぐものと感じ取り、DNAに組み込んだ時期があったと思われる。虫はどうか分らないが、ヒトはそれ以来、太陽をありがたいと思い、その思いを信仰にまで高めて儀式さえ作ってきた。日本人が「初日の出」を拜むのは、誰が定めたものでもないようである。抵抗もなく自然にそうしているとしか思えない。太陽に関する神話を想起させるような原始的なイメージは、てんとう虫にはないのかもしれないが、ヒトには太古の普遍的な行動(思考)パターンがDNAとして今日まで伝わっているように思われる。

現代の脳科学では、ユングの説がどの程度まで正しいのか明らかにはできないようであるが、ヒトが太古の原風景や原環境に近似のものに脅威を感じたり、心が安らいだり、心躍るものを感じて惹かれ傾斜してゆくのは、DNA(本能)に極めて近接した無意識下の神経回路が形成されていて、その原始の記憶が意識にのぼってくる可能性があるのかもしれない。おそらく「私たちが日ごろ意識していることのほかに、脳の中に意識にもものばらない記憶を保つ神経回路があって、それが何らかの刺激によって発現するのではないのでしょうか。私たちはそのような無意識な感じ方を遺伝的に受け継いでいるのではないのでしょうか。」³⁾という論者がいる。こうした考え方は、現在のところ確証はないがユング流と言える。

「心」を脳の活動の所産と捉えて、無意識の気がつかないところでも、さまざまな心の活動が行われており、意識されているのは氷山の一角に過ぎないとフロイドは考えた。そうした意識されない心の部分は、実は他の人や民族内でも共有されており、動物や植物に対する何らかの想いや価値観を抱く場合も同様で、それが集団的な無意識であると考えたのがユングである。ユングは、この集団的無意識について、個人の心の中には、個人の記憶のほかに、原始時代から存在する膨大なイメージがあり、この太古からのイメージを取り出して意識に上らせる能力があって、それは遺伝すると考えた。

ヒトの脳の一番下等な、あるいは基本的な部分は、首のすぐ上の部分の脳幹で、呼吸・心拍、生命維持等の重要な機能を担っている。進化論的にはサカナとそれ以上の動物はこれを持っている。睡眠・覚醒の機構と意識を支配する部分(網様体)がある。

その上にある大脳辺縁系は、動物の縄張り、子育て等を支配し記憶を司る、爬虫類とそれ以上の高等動物がもっている脳である。このような動物の本能行動や感情(情動)、内臓機能の調節等を支配している領域が、大脳底面と脳幹にかけて存在していて、辺縁系と総称される。高等な哺乳類はその上部に大脳新皮質をもち、それがその他の大脳旧皮質、大脳辺縁系、脳幹を包み込んでいる。

大脳辺縁系(爬虫類の脳)は潜在意識発現の場と考えられ、本能は辺縁系などの古い脳の記憶の中にあるのではないかと考える人もいる。その古い記憶(潜在意識)に関する上記のような神経回路が形成されていて、「感動/脅威・恐怖」のような原始的な(論理が説明しない)情動の記憶が意識に

上ってくることがあるのかもしれない。

この辺縁系に属する扁桃体は（側頭／前頭）連合野の認知機構と繊維連絡があり、また視床下部（本能行動）とを結びつける仲介をしていることが示唆されることから、大脳辺縁系皮質（梨状葉も）は、「感動する」を含むヒトの感情（情動）に深く関わっている。⁴⁾ 怒り、恐怖、喜び、快感、不快感のような心の動きは感情／情動（emotion）である。情動は一度生起すると、長時間持続する。この傾向は爬虫類の脳も持っているかもしれないのである。

ヒトの個体発生の過程において、胎児の形状が爬虫類に似た形をとる時期がある。仮に、この爬虫類に似た時期の胎児の脳がこれらの情動を持続的に生起し保持すると想定すれば、胎児はその頃から、これらの怒り、恐怖、喜び、快感、不快感のような心の動きを持っていることになる。そうした情動から怒り・恐怖・不快感等を除去すれば「喜び」や「快」の情動が残る。この喜びと快を母体が共有すると胎児の成長や、その後の人格形成にも好ましい影響を与えるとするのが、いわゆる胎教の中核となる想定であると考えられる。

快・不快等の情動は、哺乳類の扁桃体・梨状葉を刺激すると攻撃行動や逃避行動等を引き起こす実験から、過去の不吉な体験も不快の基になり、扁桃体が情動発現に関わっているという直感が得られる。情動発現は動物本能に根ざした低級なものかも知れないが、情動発現の体験も記憶されるので、それらを誘発する領域にはかなり高級で複雑な情報処理が必要になる。特に情動の結果が、心の中にある快・美しさ・健やかさ・清浄さ等に結びつく場合は、前頭葉の働きが関わる。

2. 2 人間らしさ：「情動—判断—決断」と快・不快について

人はなぜ人の心が分るのだろうか、人は自分を犠牲にしてまで、なぜ他人のために何かをしようとするのか。なぜそれほど優しいのか。これは、「人はなぜ人間らしい」のかという問いかけである。そこには何が大事で大切かを判断する規準がある。そして、その規準は後天的に親や他人から学ぶものである。

幼い時に母と共に初めて見た、神社の社殿内で行われていた巫女の舞を思い出す。舞を舞う巫女達は、白衣の（和）服に緋の袴をはき、きらきらと輝く装飾を施した冠を頭に載せ、白く輝いている幾つかの鈴をつけたものを手で振りながら（そして、その鈴の音は思ったよりも大きな音であったが）、笙と琴などの楽音にあわせて優雅に舞っていた。あの楽音と巫女の舞は幻だったのかと思うほどに、俗世からかけ離れた状況がそこにあった。巫女、音楽、神社とその人々の装束は不思議なほどに周囲の景色と一体になっていた。それは一種の荘厳な雰囲気を作り出し、息を飲んで見ている者の心を奪って追った。

そこには何の違和感もなく、異国情緒さえなく、当然の事として理解できるものがあつた。そのことに反発や反抗を感じるようなものは微塵もなかった。それは、「すごい、きれい、美しい、格調が高い、静謐、壊してはならない特別なもの・・・」だけでは、表現する語彙が足りないような世界であつた。平安・鎌倉時代の貴族達には「・・・の舞」と呼ばれていた完成度の高い芸術の様式であつたのかもしれないが、幼い心にも、それは何か懐かしいような感じさえ与える楽音であつたと記憶している。

大人になる過程で、それは「うらやすの舞」（浦安の舞）と呼ばれる雅楽の舞であると聞かされ、「うらやす」（浦安、心安）は大和・日本国に付する言葉であると知つた。言葉は万葉時代にまで遡る。その頃まで、朝鮮半島は激動する政治情勢下にあり、三韓滅亡等を経験していた。それと比べれば、大和（日本）は心安らぐ国であつたことをその舞いは想像させる。

それは誰にも話そうと思わなかつた思い出である。誰もがこの種の思い出は持っているのかもしれない。ただ、話すことを抑える何かの力が働いていたのは確かである。

前頭前野には人が自由奔放に行動しないようにする働きがあり、そこでは選択・意思決定が起こると言われている。

我々が慣れた事を行う時は、前頭前野はあまり働かず、通常の行動の90%は自動ルートに任せている。しかし、緊張が高まったり危険な状況に遭遇すると、前頭前野は血流が増しフル回転をする。同

様のことは予期しないことが起こった時も、思考ルートを活発に働かせる時も、状況が流動的に変化するので脳が思考ルートを刻一刻変えなければならない時も、判断材料が不足しているのに一瞬のうちに決断を迫られる時も起きる。このような小から大に至る決断には2つの場合がある。

1つは認知的に過去の情報・知識に基づいてデジタル的に行う決断である。もう1つは「情動動機付け」によるものである。後者は、ある状況で無意識的に「よく分らないけれど嫌だな」とか、「乗気でないな」など、理屈ではなく、人を駆り立て、人を押しとどめる脳の働きである。前頭葉には外側部と底面に当たる眼窩野（前頭眼窩野）があり、その「前頭眼窩野」が情動動機付けに大きな役割を果たしている。眼窩野に障害を受けると決断が出来なくなる。その場合、例えば損をすると分っている行為でも行ってしまふ。眼窩野が正常に機能している時は、アナログ的ではあるが、それは無意識に何となく「カン」で危険であるとか、良さそうである、という事を掴む働きをする。前頭葉はこの2つの働きを統合して我々に選択・決断をさせている。「情動動機付け」では日常の些細な決断はさほど問題にはならない。しかし、不確定要素の多い経済状況判断とか、交際する人の将来性を判断するような、理屈で説明できる確たる情報がないような場合、ある意味で無意識的ではあるが、我々の心を動かすのに「前頭眼窩野」は重要な役割を果たしている。（注1）

好き嫌いの中核と言われている扁桃体から前頭葉の底の部分にあたる前頭眼窩野を通って前頭前野に至る情動ルートは、我々の価値判断を大きく左右する。こうした価値判断の習得には、前頭眼窩野にある神経細胞が関わっている。報酬を期待する時に興奮する神経細胞の活動も、それが裏切られた時に活動する細胞の活動も見つかっている。我々はこうした神経細胞の働きによって人生の様々な試行錯誤の中から価値判断の規準を見つけていく。我々の脳は将来何が自分のためになるのか、予測の仕方を変えることができる。これは社会生活をする上でとても重要で、状況の変化を素早く察知して、それに柔軟に対応できなければ、社会生活に支障が起きかねない。前頭眼窩野はこうした学習や、学習のし直しにも関わっている。（注2）

報酬を超えて相手の心を理解し、思いやる事が出来るのも、人間で特に発達した心の働きである。時には自分の利益をさしおいても、相手の役に立ちたいという気持ちさえ生まれる。我々が人の心が理解できるのは4歳半の頃からである。我々は顔の表情から怒っているのか、優しく笑っているのか、真面目なのか、悲しそうか、嬉しいのか、分るのである。このような時に前頭前野が使われ（右の前頭前野の方が少し強く活動する）。（注3）

人が苦しんでいる時には優しくし、助けようと決断し実行することは、例えば「他人の表情から怒っているのか、優しく笑っているのか、真面目なのか、悲しそうか、嬉しいのか分る」ことが前提になっている。この極めて人間的で幼児にも分る事柄が‘healing/therapy’の出発点になっており、癒しには神（的なもの）が介在しなくなった分を補う新しい要素が必要になっている。それらの要素の検討が必要になってくる。

（以下次稿）

（注1）この段落はNHK Educational TV, 何が人間らしさを生み出すのか・脳の秘境・前頭葉の謎 前頭葉や脳の働き, ほか（10:30-11:00 am, 1003（平成15）年11月24日）の要約である。

（注2）この2つの段落は同上。

（注3）この段落は同上。

引用文献

- 1) 日野原重明 [監修], 篠田, 加藤 [編集] 『音楽療法入門』上 理論編, 1998, 春秋社, p. 4
- 2) James Wilce, Healing. In: Alessandro Duranti, Key Terms in Language and Culture, Blackwell Publishers Ltd 2001, pp.91-93
- 3) 柳澤桂子 「いのちの始まりと終わりに」 草思社, 2001, p.177

参考文献類

- 1) Hornby, A. S. (ed.) OXFORD ADVANCED LEARNER'S DICTIONARY, Oxford University Press, 6th ed., 2000
- 2) 日本経済新聞 Sunday Nikkei 欄, 「虫の声が脳を活性化」(千葉工業大学大橋力教授等の研究紹介記事) 2002 (平成14年) 10月20日
- 3) 大法輪編集部 (編) 「真言・梵字の基礎知識」大宝輪閣, 平成5年
- 4) 村松道一 『ニューロサイエンス入門』サイエンス社, 1997